



図書館だより

2016.11
No. 26

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191(代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

佐世保校附属図書館の魅力 向上が急務

稲 永 忍

(理事長)

この4月、理事長に就任しました。よろしくお願ひします。少し自己紹介すると、職歴は、東京大学農学部→鳥取大学乾燥地研究センター→国際農林水産業研究センター→鳥取県産業技術センター→株式会社トーエル→ものつくり大学。東京大学と鳥取大学では教員として作物学や砂漠化対処論に関する教育研究、その後の勤務先では理事長や学長等として主に経営に従事しました。

さて、このたび佐世保校附属図書館の石田館長から『図書館だより』への寄稿依頼を受けた時、一瞬お断りしたいと思ひました。それは、私が図書館をほとんど利用したことがなく、推奨できる読書法や本を持ち合わせないからです。仕事に必要な文献は定期購読雑誌やインターネット、研究仲間等を通じて入手し、また趣味の本は書店や新聞広告で見つて購入します。そして、気の向いた時にごろ寝して読みます。読み方は、はじめに・目次→最終章・あとがき→それより以前の章という順に、また何冊かを並行して読むというものです。図書館を利用しない理由は、咳払いもはばかれる静寂さや椅子の硬さ、飲食物持ち込み禁止などが性に合わないことにあります。

しかしながら、寄稿は引き受けざるを得なかったため、私のように図書館を利用しない学生がどの程度いるかという点に着目してみました。昨年、佐世保校附属図書館で実施し



た学生アンケート結果によると、「ほとんど利用しない・利用したことがない」は15.8%、「月に数回利用」が最も多く37.8%、「週1回以上利用」が30.4%となっています。また、学生の利用者数(延人数)が平成22年度の81,411人を最高に毎年減少し、平成27年度は平成22年度に比べてマイナス31%との統計結果もあります。この数字は、学生にとって佐世保校附属図書館の魅力が薄れつつあることを示していると思ひます。

そこで、文部科学省の「大学図書館の整備について(審議のまとめ)-変革する大学にあって求められる大学図書館像-」(平成22年12月)を読みました。その中で「大学図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育研究にとって不可欠な中核を成す総合的な機能を担う機関の一つ」「学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、ラーニン

グ・コモンズ、大学図書館員等によるレファレンスサービス、学習支援が重要」という指摘が目にとまりました。特にラーニング・コモンズに惹かれました。これは、「情報通信環境が整い、自習やグループ学習用の家具や設備が用意され、相談係がいる開放的な学習空間。飲食コーナーが敷設されていたり、図書館外に設置されたりしている例もある」(Wikipedia) というものです。このような図

書館であれば、偏屈な私でも利用したくなります。

現在、佐世保校では新館や図書館等を除く老朽化した建物について建替えが計画され、それにはラーニング・コモンズの設置も含まれています。皆さんにとって、どのようなラーニング・コモンズや図書館が良いのか、アイデアを佐世保校附属図書館までお寄せください。



「紙で読む」ということ

石田 和彦

(附属図書館館長)

世の中、いろいろなところで「電子化」の時代です。私の研究分野である金融の世界でも、フィンテック (Financial Technology) などという言葉が日々新聞やニュースを賑わし、電子化の流れは止められないようです。そのように大袈裟に騒がなくても、振込や自動引落しなどで皆さんが日常的にお金として使う銀行の預金は、実は、はるか以前からすでに電子化されていて、例えば、ATMで振込の操作をすると、コンピュータネットワークを介して(「紙」などの物理的存在の手助けを得ることなく)、相手方の口座にお金が振り込まれます。加えて、最近では、店頭で支払って商品と直接交換する(金融の言葉では、delivery versus paymentと言います)の際に用いるお金についても、「紙」(紙幣、お札)の世界から(ただし、一部はコインなので、「金属」ですが…)、いわゆる「電子マネー」使用が次第に増加してきています。

本や出版物等の世界でも、「電子化」の流れは急速に進んでいます。多くの本が電子化され、電子書籍の形で読めるようになっていきますし、雑誌については、電子化したものを「定額で読み放題」のようなサービスも始まりました。新聞も、主要紙は、ほとんどが

「電子版」を用意し、スマホやPCで読めるようになっていきます。また、インターネット上では、無料で読めるニュースや情報も多く、実際には、お金を払って「紙」の本や雑誌・新聞等を利用しなくても日常生活には差支えない、という考え方をする人達も多くなっているようです。

そんな時代ですから、ここでは、敢えて、「紙で読む」ことの重要性を書きたいと思います。研究者にとっては一種の商売道具として不可欠であり、また、学生の皆さんもゼミの課題や卒論の作成で多数利用することがある学術雑誌も、その多くが電子化されています。しかし、紙ベースの雑誌からコピーするにしろ、電子化されたものをプリントアウトするにしろ、一度、「紙」に落とし込んで、「紙」の上で下線を引いたり、書き込みをしたりしながら読んだ学術論文等のストックは、その人にとって一生の財産です(ただし、図書館の本や雑誌に直接下線を引いたり、書き込みをしたり、は厳禁です!!)。下線や書き込み自体が、内容を理解したり、そこから思考を一步進めたりするという知的作業の重要な記録であり、将来、再度その論文等を読む必要が生じた際の、大事な手掛かりになるからです。同じ作業をスマホやPCの画面上で行い、それをファイルの形で保存してストックすることは、不可能ではないかもしれませんが、少なくとも現時点では、「紙」の方がはるかに便利だと思います。

新聞を読むことについては、前号の『図書館だより』で太田学長がその重要性を強調しておられますが、学生の皆さんにとっては、新聞こそ、絶対に「紙」で読むべき媒体の代表だと思います。新聞の電子版では、ほとんどの「見出し」が同じ大きさ・字体で並んでいます。その中から、クリック（ないしタップ）して先に進み、詳しい内容を読むべき記事を選択するのは、経験の乏しい学生の皆さんには容易なことではないと思います。これに対して、「紙」の紙面では、見出しの大きさや字体、記事に割り当てられたスペースやその配置、場合によっては、記事を区切る「線」や「枠」など、さまざまな手段を駆使して、その新聞が考える記事ごとの位置づけやその重要性が表現されています。こうした紙面上での表現を頼りに日々新聞を読んでもいけば、どの記事を詳しく読むべきか、重要な記事はどれか、などの判断力が自然と身についていくものと思います。

むろん、「紙」で読むことには相応のコストがかかります。学術雑誌、特に洋雑誌を自分で購読することなどほとんど不可能でしょう

し、本にしても、学習や研究上必要なものをすべて自分で購入するのは、学生の皆さんには困難と思います。新聞の購読料も、負担が大きいようです。しかし図書館をフルに活用すれば、そのコストを大きく引き下げることができます。図書館に行って、学術誌に掲載された論文や本の必要部分のコピー（丸1冊のコピーは、著作権法上の問題があるので注意して下さい…）を「紙」で入手し、ついでに、備え付けられた「紙」の新聞に目を通す、こうした習慣が身につけば、皆さんの（敢えて言えば、必要な本や新聞はいくらでも自分で買えるという、極めて恵まれた環境にいる人を除いて…）学生生活は、何倍も実り多いものになるものと思います。



「雑感！母校の図書館での研究活動」

宮地 晃輔

(経営学科教授)

2016（平成28）年晩秋のある時、私は研究活動のために母校の図書館に行きました。母校の図書館は、東京の都心にあり、一歩外に出れば賑やかな雰囲気とちょっとした学生街の香りがあります。

母校の図書館は学部の図書館ですが、一大学の図書館に匹敵するほどの規模をもっています。場所は私が大学生の頃と変わりませんが、建物は全面建て替えが行われ昔の面影は全くありません。現在の建物は、私が大

学生の頃とは比較にならない程、設備が充実し、セキュリティは万全となっています。この点でいまの学生は恵まれた環境にいます。

さて、私が大学生だったのは当然20世紀で、東西冷戦は終わっておらず、プラザ合意、円高不況、バブルの予兆は全て大学生の頃に起こりました。携帯電話はなく、テレカが主流、パソコンというよりワープロがようやく個人に普及し始めた頃ですが、卒業論文はまだまだ原稿用紙に手書きしていた学生が圧倒的に多かったです。テレビCMは、コカ・コーラのシリーズが全盛で、JR東海のクリスマスエクスプレスも私が大学生の頃に登場しました。

この頃、私は母校の図書館によく通っていました。この頃の図書館は、いまとは対極で

セキュリティも緩やかで、フロアには自分のところの学生のほか、予備校生、明らかに社会人という人がいました。私は、定期試験の準備、簿記を勉強するためや大学院を目指した勉強をするためによく図書館に通っていました。この時、面白かったのは図書館には常連の学生、つまり図書館レギュラーがかなりの人数いたことです。この時のレギュラーメンバーの中には、司法試験に合格して法曹になった人や税理士になった人、そして私もそうですが大学教員になった人などがいます。いまにして思えば、私にとって大学時代の図書館は、ひとつの自分の居場所でありホームタウンであったと思います。

それから数十年の時を経て、自分自身の研究活動を進めるために、具体的にはいま進めている研究テーマでの論文の執筆や学会報告をするための資料集め、蔵書の閲覧を行うために、そして次の研究構想を練るために母校の図書館に行きました。同じフロアには、数十年前の私とほぼ同じ年齢の現在の学生が予想以上に多い人数で学習に励んでいました。そこはやはり伝統でしょうか、図書館の空気

感が、私が大学生の頃とほとんど変わらないのです。そして今の時代にも母校には図書館のレギュラーメンバーの学生が居そうな雰囲気でした。

母校の図書館での研究活動は、現役の学生に混ざってとても充実したものでした。いまの研究課題を少しでも充実させるために、そして次の研究課題の構想のために、自分の原点に立ち返り、大学生だった頃の居場所で良い研究活動ができました。自分の研究がどの程度、社会的に通用しているのだろうかと常に心配（不安）になりながらも、最後までやりきることをモットーにして、大学教員の柱（軸）である研究を追いかけていく気持ちを新たにした母校での研究活動でした。また、温かくお迎え頂きました母校図書館スタッフの皆さまに心より御礼を申し上げます。

最後に、長崎県立大学の学生の皆さんには、ぜひとも大学時代の自分の重要な居場所の一つが図書館であったと言えるくらいに、本学図書館をステージに自己を成長（進化）させて頂きたいと思います。



学生に勧めたい1冊
鷺田清一著『「待つ」ということ』
(角川選書、2006年)

齋藤 毅
(国際経営学科准教授)

鷺田清一という著名な学者の『「待つ」ということ』という本がある。この著者は、臨床哲学の研究者で、大阪大学の総長も務められた方である。この本との出会いは約10年前の大学院時代にさかのぼる。当時、京都で開催された「生きるとは」というテーマの基調講演で、ある著名な先生の報告の中で紹介された本である。実は、この本を手にとって読むのは今回の『図書館だより』の原稿執筆の依頼があって初めてのことであるが、当時、博

士論文を書くことに追われる日々であった私にとって、『「待つ」ということ』というこの本のタイトルが印象的で、一度読む機会を持ちたいと思っていた。今回、その機会に恵まれたので、この本を読んで教えられたことを紹介したい。角川選書から2006年に出版された本であるが、次のような衝撃的なくだりから前書きの文章が始まる。

「待たなくてよい社会になった。待つことができない社会になった。待ち遠しくて、待ちかまえ、待ち伏せて、待ちあぐねて、とうとう待ちぼうけ。待ちこがれ、待ちわびて、待ちかね、待ちきれなくて、待ちくたびれ、待ち明かして、ついに待ちぼうけ。待てどくらせど、待ち人來たらず……。だれもが密かに隠しもってきたはずの『待つ』という痛恨の

想いも、じわりじわり漂白されつつある。……ものを長い眼で見る余裕がなくなったと言ってもいい。……かつて『待つ』ことはありふれたことだった。……数日後のラブレターの返事を待つ、果物の熟成を待つ、酒の発酵を待つ、相手が自身で気づくまで待つ、……。ところが、現代はそんな悠長な『待つ』ということができる人がいなくなっている。「意のままにならないもの、どうしようもないもの、じっとしているしかないもの、そういうものへの感受性をわたしたちはいつか無くしたのだろうか。偶然を待つ、じぶんを超えたものにつきしたがうという心根をいつしか喪ったのだろうか。時が満ちる、機が熟すのを待つ、それはもうわたしたちにはあたわぬことなのか……。」と。ここで言う「待つ」は子育てや教育に当てはめても同じことが言えるという。仕事場だけではなく、子育てや教育の現場でも「子どもが何かにぶち当たっては失敗し、泣きわめいては気を取りなおし、紆余曲折、右往左往したはてに、気がついたらそれなりに育っていたというような、そんな悠長な時間など待てるひとはいなくなっている。」

ずいぶん長い引用になったけれど、要するに鷺田が伝えたかったことは教育を例にとれば、『『育てる』という他動詞ではなく『育つ』という自動詞で、』「時が育つ、そう、『育てる』というよりも『ああ育ったあ』という感覚」を大事にしなくては教育が駄目になってしまうという点である。

もう一つ。そのような「ああ育ったあ」という感覚が起こるには、職人のように「普通のこと（日常の営み）を淡々と繰り返す」ことが大切であるということを鷺田は随所に語る。例えば陶工（陶磁器の製造を職業とする人）にとっての「待つ」ということ（「窯変」という言葉）になぞらえて次のように言う。「作為に囚われているあいだは、器はいつまでも形を現さない。そのため陶工は、作為を消

すために土をこねるかのように、土をこねる。何度も何度も、飽くことなく土をこね、そして焼く。『一人の作者に期待し得ぬような曲折』（和辻哲郎）が現れるまで、偶然に身をゆだね、待つ。まるでおのれの作為を壊すために同じ単純な動作を反復しているかのようなのである。」と。その趣旨を彼は次のようにも言い換えている。「これをひととひととの関係に引き写すなら、おのずからという、そういう自生が起こるやもしれないひとつの〈場〉が生まれるように、しかしあくまでそのためにではなくその意味が見えないままに日々くりかえされる小さな、丁寧すぎるくらいのふるまい、それらが折り重なるなかで、〈場〉の信頼感というのが醸成されてくるということだろう。」と。これが「普通のこと（日常の営み）を淡々と繰り返す」ということである。なかなか「普通のことを淡々と繰り返す」のは辛いことではあるけれど、その一つ一つを丁寧にやりとげることのなかから、おのずと何かが生み出される。勿論、それによって何かが生み出されるという見込みはないけれども。ないなかでもやっていく（己の期待を消去して）、そういう「待つ」姿勢が子育てや教育においても大切だということを鷺田はあぐねることなく語り続けている。

昨今「待つ」ということが難しくなっている状況下において気づかされる点が多い1冊であった。一読をお薦めしたい。



「一冊の本」

奥山忠裕

(公共政策学科准教授)

『図書館だより』の原稿依頼を受けましたので一筆書かせていただきます。なお、以下の文は本をあまり読まない人向けのものです。本をよく読む人はこの文を見る必要はありません。

みなさんも「本を読め、本を読め」とうるさく言われてきたかと思います。特に学校の先生はうるさく口にしてきたことでしょうか。大きなお世話だと思った人も多いのではないのでしょうか。逆に「言われて読む気がなくなった」と思った人も多くいるかもしれません。

さて、あまり本を読まない私ですが、いくつかの機会で本を読むことがあります。一つは出張や旅行などの時です。ありきたりですね。まあ、スマートフォンでゲームしていてもいいのですが、バッテリーの持ちが気になるのと、緊急の連絡が……と思うと怖くなってあまり使う気になれません。3DSなどのゲーム機でもいいのですが、揺れる電車や飛行機の中でやる気にはなれないです。なので、いつも一冊だけ本を持って行っています。推理小説や文学小説、ラノベなどジャンルは様々ですが、一冊だけ持って行っています。ちなみに必ず読むというわけでもありません。寝てしまって読まないときもあります。

「読め」と言われると読みたくなるので、読みたいな〜と思うまで読まないのです。ただ、読みたいなと思って読む本は不思議と楽しいものですし、内容もよく覚えています。あれだけ読まされて、暗記させられた教科書よりもよく覚えているのも不思議なものです。あまり本を読まない皆さんも一冊だけでいいのでカバンの中に「読んでもいいな」と思う本を入れておいてみてはどうでしょうか。新書なんかだと大した重さにもなりませんし、

ちょうどいい時間つぶしになることが多いと思います。ちなみにこんな本の読み方をしても名探偵シャーロックホームズやポアロなどのシリーズは読破したのです。10年くらいかかったけど。

次に本を読む機会があるのは「研究で困った時」です。気晴らしに本を読むとかいう話ではありません。大学の先生にはいわゆる先生としての仕事のほかに、研究という仕事があります。私のテーマは環境と経済についてなのですが、来る日も来る日も専門書を読んで研究テーマや内容についてあーだ、こーだと考えています。この研究がいったん進まなくなるとどうしようもありません。アイデアがでなくても研究成果を発表しなければならない日は遠慮なく近づいてきます（皆さんのレポートの提出期限に近い感じです）。

そんなどうしようもない時にP.O.ヨハンソンの「環境評価の経済学」という専門書をつも読み返しています（この本は極めて難しいので開くときは要注意で）。この専門書は私の研究の師匠から教えてもらいました。以来20年近くの付き合いです。環境と経済の分析手法を学ぶ上で基本から応用まで網羅されており、当時の私にとって「読むことが極めて苦痛な専門書」の一つでした。ただ、いまでもその苦痛な専門書を度々読み返しています。この専門書には環境と経済を考える上でのエッセンスが詰まっているからでしょう。そのエッセンスをみながら、昔の自分を思い出し、研究者を志した時の気持ちを思い出しています。この苦痛な専門書は何度も読み返すうちに私の人生の一冊の本になっていたのです。

目的をもって本を読むこと（レポートとかだよ）は、時には大変苦痛となります。本を読みたくなくなることもあるかもしれません。ただ、そういった多少小難しい本は皆さんにとって一生の付き合いになるかもしれません。本学の図書館にも多くの本があります。個人

の趣味でも、学習でもかまいません。本学の図書館で皆さんの人生にとっての「一冊の本」

が見つかることを祈っています。

学生に勧めたい一冊
有吉佐和子著『複合汚染』
(新潮社、1975年)

鳥丸 聡
(実践経済学科教授)

今から35年前のことだ。世の中にどんな企業が存在して、どんなことをやっていて、自分にはどんな業種が向いているのかさっぱり分からん状態だった。そもそも自分は何をしたいのかも良くわからん。いわゆるモラトリアム状態だ。そんな時、先生から「次回のゼミでTIMEの今週号を使うので、図書館で‘Economy & Business’のコピーをとっておいってください」と依頼があった。図書館というのはどうにも敷居が高いのと、なんだかガリ勉しに行くようで小っ恥ずかしかった。で、コピーを取っていると、同じゼミ生が図書の返却にやってきた。その返却本が有吉佐和子著『複合汚染』(新潮社、1975年、文庫版・1979年)だ。

『複合汚染』については、当時の私の愛読書「週刊平凡パンチ」や「週刊プレイボーイ」の書評のコーナーで読んでいたので、農業被害の告発本としてベストセラーになっていることくらいは知っていた。「その小説、面白かった？」と尋ねると、「これ小説じゃないけど、滅茶苦茶面白かった。立派な調査研究報告書だよ」とのこと。早速、大学図書館から借りて読んだのが『複合汚染』との第1種接近遭遇だ。

下宿に帰ってパラパラめくると吃驚仰天。後半部分に、当時、シビックやアコードに搭載されていた排ガス対策CVCCエンジンの断面図(下巻、198ページ)が描かれていた。1頁めくると「空燃費に対するエミッション特性」のグラフ(下巻、200ページ)が、前

に遡っていくと「家庭用洗剤の生産量推移」のグラフ(下巻、111ページ)や「PCBの化学構造式」の図(下巻、121・128ページ)が載っている。一晩で一気に読んだ。

『複合汚染』は単なる公害摘発本ではなかった。膨大な量の文献調査と科学的なデータ収集・分析、そして多数の専門家へのヒアリング調査を集大成した調査研究報告書だった。当時の農業公害や大気汚染の複雑怪奇なメカニズムについて、本田宗一郎さんを初めとするその道の最前線の研究者との会話や、横丁のご隠居との会話を引き合いに出しながら、丁寧に分かりやすく、そして楽しく伝えている。

この本を読み終えた時に、自分がしたかったことは、文献を読み、統計データを収集し、さらに足を使って現場の声を聞いて回り、「曖昧模糊とした経済社会の現状と課題」を分かりやすく一つにまとめる「調査マン」になることだと気付いた。就職先を検討するにあたって、企業という組織で就職先を探すのではなく、職種というキャリアで就職先を選びたいと強く思うようになった。そうになると、選択肢は一気に広がった。どんな企業にも「調査研究部」的な部署はあるだろう。最初は営業でも経理でも構わない。それも勉強だと割り切れるようになった。

結果、第一志望だった新聞社は最終選考で落ちて、地元の銀行に就職した。銀行の最初の5年間は支店で新規融資先開拓を担当した。これが実に面白い。融資の稟議書を書くのに工業技術センターや水産試験場を訪ねて、新規事業案件のエビデンスを収集し、大学を



訪ねては専門家の意見を聞いたり、貸出審査事典でその業界動向を研究したりして、数ページの稟議書にまとめた。6年目からは調査部に配属されて頭取の横で毎月の管内景気動向分析調査結果を記者発表したり、業界動向や地域経済の調査報告書を書くようになった。10年目にはシンクタンクで国や地方自治体からの委託を受けた調査研究業務に従事し、15年目からは情報研究部長として調査月報の編集長を務めながら九州経済白書を執筆した。この時、九州地区の専門図書館協議会の代表も務めるようになった。学生時代に「図

書館の敷居は高い」と感じていた自分が、いつの間にか、「学生時代に大学図書館を使い倒しなさい」と学生に教えるようになったのは笑える話かもしれない。

『複合汚染』との出会いが、私の人生の方向性を論してくれたと今でも感じている。何も『複合汚染』でなくても良い。山崎豊子著『沈まぬ太陽』（新潮文庫、2001年）でも、池井戸潤著『下町ロケット』（小学館文庫、2013年）でも良い。学生には、かけがえのない一冊と大学図書館で出会って欲しいと願う。

図書館インフォメーション 各コーナー案内など

学生による選書コーナー

H28年度は

230冊選出



新刊コーナー

10月貸出

No.1

村田 沙耶香 著『コンビニ人間』(文藝春秋、2016年)



指定図書コーナー



学生必見!

英語多読コーナー



難易度1~5

「秋は大学図書館へGO!」～長崎県大学図書館協議会 合同キャンペーン

学生を対象に図書館利用を呼び掛ける同キャンペーンで、佐世保校では、10月18日～11月14日、合同企画「脱出ゲーム」を開催。

脱出者 22名 おめでとうございます!

冬も大学図書館へGO!

長崎県立大学佐世保校附属図書館は地域に開放しています。

専門図書やベストセラーなどを揃え、貸出もできますので、お気軽にご利用ください。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2016年11月29日